女院御書　上巻

底　本　文政三年木版本　辨才本
対校本　寛文十一年木版本　空覚本

女院御書　上巻

[①]

念仏して[②]往生をうる事は、弥陀の本願、釈尊の附属、諸[③]仏の証誠、凡夫[④]往生の実行一代の真説なり。

但し[⑤]念仏といふは、仏を念ずるなり。仏を念ずる[⑥]といふは、其仏の因縁をしりてその功徳を念ずるを、真の念仏とはいふなり。

しかるに念仏について二つあり。一には諸経の念仏、二には観経の念仏なり。

諸経の念仏に三つ[⑦]の心あり。一には法身の念仏、二には報身の念仏、三つには応身の念仏[⑧]なり。法身の仏には実相の妙理を念じ、報身の仏には常住の智恵を念じ、応身の仏には随縁[⑨]の大悲を念ず。今しばらく仏についてかくのごとくの三位を分つといへども、所詮諸

① 「比丘證空述」
② して＝「の」
③ 諸仏＝「六方」
④ 凡夫往生の実行＝なし
⑤ 但し＝なし
⑥ る＝なし
⑦ つの心＝なし
⑧ 念仏＝「念仏是」
⑨ 縁＝「機」

経の意といふは、衆生の心の外に別の仏なしと説くゆ[1]え、仏を念ずる[2]といへるはたゞ我心を念ずるになるなり。

たまたま名号を称念すといへども、倶にこれ定善の心に住して三昧の位にいたらん事を望みとす。たとひ定善に堪ざるもののために散心の称名を教ふといへども、猶[3]これ一心の義を成ず[4]る事を待つゆえに定善[5]にをさまるなり。

これによりて諸経の念仏の成不成は偏にこれ自の心の悟ると悟らざるとによるなり。

二つには観経の念仏といふは、南無阿弥陀仏これなり。[6]これ極悪深重の苦機のうへに成ずる別願所成の称名なり。故にたとひ相好を念ずれども、かならずしも思をやめ心をこらすべしとも願ぜざれば定善にもあらず。また口に名号を称すれども、正しく悪を廃し善を修すべしとも誓[7]ひ給はざれば散善をもはなれたり。

若しそれ定善を本願[8]とせば、思ひをやめ、心をこらさゞるものは

① ゆえ＝「ゆえに」
② る＝なし
③ 猶＝なし
④ ずる＝「ざる」
⑤ 善＝「心」
⑥ これ＝なし
⑦ 誓ひ給はざれば＝「不レ誓ハ」
⑧ 願＝なし

捨られぬ。散善の修行はすべて往生すべからず。もしそれ散善を本願とせば、悪を廃し善を修せざる凡夫はきらはるべし。また造悪の輩はながく生死を出べからず。

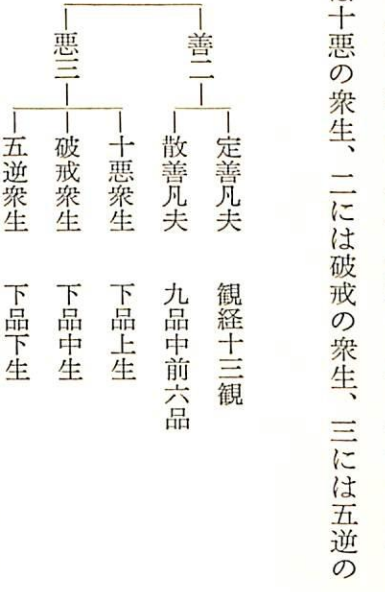
これによりて弥陀の本願といふは定善にもあらず散善にもあらず。只これ定散の上に成ずる他力の一行なり。既に定散をはなれたる故にかへりて定散の二機は成ずるも成ぜざるも、仏願に乗じぬれば念仏の機となるゆえに、皆ことごとく往生するなり。

今この南無阿弥陀仏といへる南無は、是阿弥陀仏の四十八願をもちて正覚を成じ願はれ給へる功徳について、我等穢土をいとひ浄土をねがひ命を捨て彼国にうまれんと欲する、十方衆生の帰命のこころなり。

十方衆生ひろしといへども善人と悪人との二つを出ず。善人について又二つあり。一つには定善の凡夫、二つには散善の凡夫なり。定善の凡夫といふは、心をすまして物を観ずる機なり。観経の中の

① すべて＝なし
② それ＝なし
③ るべし＝「れ」
④ 輩らは……出べからず＝「輩らは、永かく通入すべきに非す」
⑤ 散＝「善」
⑥ 往生＝「往生を」
⑦ この＝なし
⑧ を成じ＝「なり」
⑨ ねがひ＝「ねがひて」

日想観より雑想観にいたる十三人これなり。散善の凡夫といふは、悪をとゞめ善を修する機、同[1]経の上品上生より中品下[2]生にいたるまでの六人の姿これなり。悪人について三つあり。所謂下品の三人これなり。此経の意は[3]機については定善・散善・善人・悪人の不同ありといへども、仏の本願に乗じて往生をうる事は差別ある事なき故に、十方衆生ひとしく南無の心を発すなり。[4]この南無の心を発す衆生の善悪の不同といふは、善人に二人、定善の凡夫、散善の凡夫、悪人に三人、一には十悪の衆生、二には破戒の衆生、三には五逆の衆生なり。



① 同＝「同く」
② 下＝「中」
③ は＝なし
④ この南無の……衆生なり＝なし

南無といふは度我[註1]の義、我をわたし給へといふ心なり。此心を天竺には南無といひ、唐土には帰命といふ。帰[①]命といふは経に説[とく]がごとく命[②]を仏にたてまつるといふ心なり。衆生の重んずる宝、命にすぎたるはなし。この命をおもふが故に、諸の罪をつくりて、三世[註2]の諸仏にもすてはてられ、十方の浄土にもい[③]まだいれられずして、曠劫よりこのかた[④]今にいたるまで、生死に輪廻してたゞ無量の苦悩をのみうく。

しかるに今うけ[⑤]がたき人身をうけ、逢がたき観経の教により仏の願力をきゝたて[⑥]まつれば、善悪の凡夫ひとしく煩悩の胸のうちに歓喜の心おこりて、信心のあまり命を阿弥陀仏にたてまつるなり。

云何となれば、一切衆生命ををしむに三つ[⑦]の故あり。一つには今生の名利ふかくして、其望をとげんまで仏神に祈誓[⑧]してもこれををしむ。二つには後生の苦患を思ふが故に、遂にのがるべき道にはあらざれども、未来[⑨]の果をおそれてこれををしむ。三つにはたゞ生あ[⑩]

註1 『法華文句』巻第四

① 帰命といふは＝なし

② く＝「し」

註2 『悲華経』巻第六

③ いまだいれられず＝「至らず」

④ このかた今にいたるまで＝なし

⑤ うけがたき……逢がたき＝なし

⑥ たてまつれば＝「止[もとむ]れば」。「きゝ止れば」は「きゝ上れば」即ち「きゝたてまつれば」の誤写誤読か。

⑦ 三つ＝「二」

⑧ 誓＝「請[せい]」

⑨ 未来の果＝「来果」

⑩ 三つには……命ををしむ＝なし

るものは命ををしむ。

かくのごとく惜む命をすつるに又二つの故あり。一つには世間の一旦[1]の恩愛を報ぜんがため[2]に、名利[3]のためにすつるもあり。二つには仏法希奇の利益にあへりとおもひてすつる者もあり。

我等多生の間、或はをしみ或はすてし命おほくはこれ恩愛名利の為なれば、流転の業のみ[4]かさねたり。たまたま仏法に命をまかする時も[5]、真の信をとらざりければ、いまだなほ常没の凡夫たり。命ををしまず[6]修行せしもその功[7]およばざれば、いまだ菩提を証せず。

ここに願力成就の阿弥陀仏、十方無善の衆生の上に凡夫引接の正覚を成じ[8]給へる名号を聞えつれば、諸仏の浄土の中よりえらびとる[9]西方極楽は、もとよりこれ別願所成の報土なり。かの国の快楽[11]をおもふに穢土の中の悕望[12]は着すべき謂なければ、真実の信心おこりなん後は往生疑なきゆえに、限ある命ををしむべきにあらず。無能礙者の来迎、諸邪業繫の機をへだてず、仏[註1]の願力をもちて五逆十悪罪

① 一旦＝「一旦の」
② が＝なし
③ 名利のために＝なし
④ のみ＝「を」
⑤ も＝「は」
⑥ ず＝「で」
⑦ その功……証せず＝「功無しおよばざれば今菩提を証せず」
⑧ じ＝「り」
⑨ る＝「りし」
⑩ もとより＝「もとよりも」
⑪ を＝「並へて」
⑫ 悕望＝「希望」

註1 『法事讃』上巻

滅してことごとくうまれ、[1]謗法闡提心をめぐらしてみな往ば、後生の重苦を受くべきにあらず。[2]露命こゝに尽なば仏[3]を見奉ん事疑はず。[4]我と功をつみ徳を重[5]てうまるべき浄土にあらざれば、凡夫の[7]自力修行のために此命ををしむべき[8]にあらず。又難信希有の法に逢ぬる事は、仏道の人身を得たる命の徳用なれば、いたず[9]らにいけるをあながちに捨[10]んと歎くべきにもあらず。況穢土の内の修行は浄土の功徳にすぐる事、[註1]十種の利益あり。経論にひろく説がごとし。自行化他[12]のつとめ止悪修善のおこなひこの時においてはげみ[13]いとなむべし。

いつも疑なき他力摂取の往生なり。たとひ残りの命ながくとても[14]いかほどかあらん。名利の悕望は衆生の総体なれば一期さらに尽べきにあらず。観音の台に乗[16]うつらん時、煩悩の家をいでん事このたびなりと深くたのみてうたがはず。命を阿弥陀仏に帰属す、この心をおこすを帰命とはいふなり。

阿弥陀仏といふは願力所成の覚体、凡夫引接の功徳なり。今この

① う＝「む」
② 露＝「運」
③ 仏を見奉ん＝「見ん」
④ 我と＝なし
⑤ 重＝「重ね」
⑥ う＝「む」
⑦ 自力＝「自力の」
⑧ に＝「にも」
⑨ ず＝「つ」
⑩ ん＝「てむ」
⑪ すぐ＝「すぐれた」
註1 『維摩詰所説経』香積品　巻第十
⑫ 行＝「力」
⑬ みいとな＝なし
⑭ て＝底本・対校本ともに「て」有るが、誤入欤
⑮ かり「く」
⑯ うつらん＝「遷む」

仏になり給へる因縁をあきらむるに総じて三つの位あり。一つには因位、二つには中間（ちゅうげん）、三つには果上、所謂初と中と終との三つの位なり。

- 阿弥陀仏―三
  - 一、因位―二
    - 思惟ノ時節　五劫
    - 思惟ノ誓願　四十八願
  - 二、中間―二
    - 修行ノ時節　兆載永劫
    - 修行ノ功徳　六度万行
      - 定善
      - 散善
  - 三、果上―阿弥陀仏―二
    - 依報
    - 正報

一つに因位といふは、五劫の思惟をおくりて四十八願を発し①給へる位これなり。その四十八願といふは、思惟の劫数は久しといへども、一々の願の意は只名号をもちて本願とおもひさだめ給へり。経釈の文分明なり。玄義[註1]に大経を引て曰、法蔵比丘世饒王仏のみもとにましまして菩薩の道を行じ給ひし時、四十八願をおこし②一々に願

① し給へる＝「す」

註1 玄義分
二乗門

② し＝「す」

じて云①、若我仏を得たらんに十方の衆生我名号を称して、我国に生れ②んとねがひて乃至十念せんに若生ぜ③ずば正覚をとらじと誓ひ給④ふて、今既に成仏したまへる⑤、即これ因に報⑥ひたる御身なり、といへり。

又⑦、五会法事讃註1には⑧、かの仏因中に弘誓を立⑨、名を聞て我を称⑩念せば総じて来迎せん、貧窮と富貴とをえらばず、下智と高才とをえらばず、多聞と浄戒を持てるとをえらばず⑫、破戒と罪根の深きとをえらばず⑬、たゞ心をめぐらして多く念仏せば、瓦礫変じて金となさしめん。

又、撰註2択集に釈して曰、もしそれ造像起塔をもちて本願とせば、貧窮困乏の類はさだめて往生の望みをたちなん⑮。しかるに富貴のものはすくなく貧賤のものは甚おほし⑯。もし智恵高才をもて本願とせば、愚鈍下智のものはさだめて往生の望を断なん。しかるに智恵のものはすくなく愚痴のものははなはだ多し。もし多聞多見をもちて

① 云＝「云く」
② れ＝「せ」
③ ぜ＝「れ」
④ と誓ひ給ふて＝なし
⑤ る＝「り」
⑥ 「報」は「酬」とその意同じ
⑦ 又＝なし
註1 『五会法事讃』
浄土宗全書六巻六八六頁
⑧ は＝「云く」
⑨ 仏＝「仏の」
⑩ 立＝「立つ」
⑪ 称＝なし
⑫ とを＝「をも」
⑬ とを＝「をも」
⑭ 撰＝「選」
註2 『選択集』第三、念仏往生本願篇
⑮ は＝なし
⑯ おほ＝「をお」

本願とせば、少聞少見の輩はさだめて往生の望みをたちなん。しかるに多聞多見のものはすくなく少聞少見[1]のものはは[2]なはだおほし。もし持戒持律をもちて本願とせば、破戒無戒の人はさだめて往生の望をたちなん。しかるに持戒のものはすくなく破戒の者ははなはだおほし。自余の諸行これになぞらへてしるべし。当にしるべし。上の諸行等をもち[3]て本願とせば、往生を得るものはすくなく、往生を得ざるものはおほし。しかればすなはち[4]阿弥陀如来法蔵比丘のむかし、無縁平等の慈悲に催[6]ほされて、一切衆生を摂せんがために、造像起塔等の諸行をもち[7]て往生の本願とせず、唯称名念仏の一行をもちてその本願とし[9]給ふなり。

二つに[10]中間といふは、五劫思惟ののち十劫正覚のさき、六度の万行を修する兆載永劫の時これなり。三世の諸仏の仏に成たまふ道かならず願と行とを具足す。唯その願のみあれば願むなしくして到[11]るところなし。唯その行のみあれば行むなしくしてまた到[12]るところな

① 少見＝なし
② のもの＝「なる」
③ もち＝「し」
④ しかれば＝「もししかれば」
⑤ 阿＝なし
⑥ ほ＝「う」
⑦ ち＝なし
⑧ ち＝なし
⑨ し給ふ＝「する」
⑩ つに＝「には」
⑪ 到＝「至」
⑫ 到＝「至」

し。願行相たすけて所為皆剋すといへり。往生成仏ともに願行たがひにかけぬれば成ずる事をえず。たとへば鳥の二つの翼のごとく、[1]車の二つの輪のごとし。ここをもちて法蔵菩薩の、諸仏擯出の凡夫を救はんために、はじめて超世無上の別願を立といへども、誓願を発すばかりにては正覚を成ずべからず。[2]しかるに我等極悪深重の苦機なれば[3]更に生死解脱の業をたくはへず。[4]凡そ山をくづし岡をくづすにあらずんば[5]なんぞ海をうめ江をうめんや。[6]これによりて十方無善の衆生にかはりて、三大僧祇の修行をおこすなり。所謂一切の諸悪は五逆重罪よりはじめて少罪軽業にいたるまで、誓願のこころをもちて衆生にかはりてことごとくこれを懺悔して、生死の根をたち失ひ、無量の諸善は孝養父母よりはじめて甚深の妙行にいたるまで、又誓願のこゝろをもちて衆生にかはりてこれを勤修して、浄土の因にそなへ給へり。是若一悪ものこらば清浄ならざるゆえに、不清浄の凡夫を摂する清浄の業成ずべからず。一善もしかけなば正覚の位

① く＝「し」
② 成ず＝「なる」
③ しかるに＝「されば衆生をわたさんと云心さし成すべからず。しかるに」
④ れば＝「り」
⑤ 業＝「業因」
⑥ 凡そ＝なし
⑦ ん＝なし
⑧ して＝「す」
⑨ 是若一悪も＝「是則一悪若し」
⑩ 清浄＝「清浄の業」
⑪ な＝なし

にいたるべからざるによりて、不修善の凡夫をわたす他力の行成ずべからず。故に成じがたきをよく成じ、修しがたきをよく修し、功をつみ徳をかさねて、無央数劫の中において因行果報の業を修す。

所修の行おほしといへども、総じて是をいふに二とす。所謂定善散善これなり。是則大悲の胸にある時は五劫の思惟となり、身口に出て行ずる時は兆載の修行となる。行ずべき処をさきだちて誓願し、誓願の心をおろして修得す。是によりて因位と中間とは願と行とによりて差別すといへども、其善体においては共にこれ一なり。善体すでにかはらざれば願行またはなるゝ事なきなり。

ここをもちて観経の意は、定散は念仏の中より説出されて凡夫のうへに成ずる事をあかし、念仏は定散の中より説出されて他力の行なる事を立て定散と念仏と互に具足するなり。

三つに果上と云ふは、願行すでに成就して阿弥陀仏となりあらはれ給へるこれなり。

① いたる＝「至」
② おいて＝「及て」
③ 定善散善＝「定善散善の二つ」
④ 心を＝「心を手を」
⑤ て＝なし
⑥ 立＝「立レ」
⑦ つに＝「には」

①已に中間の修行は因位の誓願よりおこりて願行これ一なり。しかるに因はかならず菓にいでて熟し、菓は則因にかへりて結ぶ。因果則不二なれば色心これ一体なり。

故に弥陀一仏の功徳といふは、上烏瑟の頂より下千輻輪のあなうらにいたるまで、内証外用相好光明たゞ念仏三昧の功徳として凡夫の往生を体とす。たとへば梅の種をうえつれば、根茎枝条葉華菓大小長短を論ぜずみな梅なるがごとく、阿弥陀仏の身量は大身を現じて虚空の中にみち、小身を現じて丈六八尺となる。みなこれ願力所成の功徳衆生摂取の仏身なり。

ここをもちて観経の中には、八万四千の相好光明あまねく十方をてらすに、但念仏の衆生のみ摂取してすて給はずと説けり。

⑥善導和尚これを釈したまふに三縁の義あり。一つには親縁、二つには近縁、三つには増上縁これなり。

一つ⑦に親縁といふはしたしき縁なり。したしきといふは阿弥陀仏

①已に＝「已に因位の誓願は」とあり続いて「中間の修行によりてあらはれ」の補足文あり。
②り＝「つ」
③果＝「位」
④梅＝「むめ」
⑤力＝なし
⑥善導＝なし
⑦つに＝「には」

の念仏の衆生にしたしき縁なり。①したしといふ字はおやとよめり。親はこれしたしきの②極りなり。伯父③兄弟をしたしといふ事、みなもと親の因縁よりおこれり。しかるに親と子とをしたしといふことは、父母の精血をもち[註1]て④外縁とし、自らの業識をもちて内因として、内外の因縁和合するが故に、子はたとひいやしけれども親にしたしく、親は至て貴けれども子にしたしきがごとく、今仏と衆生としたしといふ事は、身の内にある仏性をさしてしたしといふにはあらず。又四弘六⑤度を修して我と仏にしたしくならんと云ふにもあらず。只これ弥陀の正覚は凡夫の称念を因とし、凡夫の称⑥念は弥陀の正覚を縁として、内外の因縁和合して仏も正覚を成じ⑦衆生も往生を得るによりて、⑧これ親しき義といふなり。故にかの仏はこれ位⑨高く徳おもくして、三賢の菩薩もなほ⑩望みをへだて、二乗の聖人もその名をだにも聞ざれば、況や我等愚⑪痴の凡夫、いかがしてか⑫百千劫の中におきて、声をたてゝ唱へ、身をくだきて礼し、心をつくして念

① したしと……おや＝「したしきと云文字はをや」
② の＝なし
③ 父＝「叔」
④ ち＝なし
⑤ 六度＝「六度等」
⑥ 称＝なし
⑦ じ＝「り」
⑧ これ＝「これを」
⑨ 位高く＝「高位の」
⑩ ほ＝「を」
⑪ 愚痴の凡夫＝なし
⑫ してか＝なし

註1 序分義
散善顕行縁
孝養父母の釈文

ずるとも[1]、聞たまひ見たまひ知食（しろしめ）すべきにあらず。しかれども本願をもちての故に、口に常に仏の[2]御名を称すれば、仏すなはちこれを聞給ひ、身に常に仏[3]を礼敬すれば仏すなはちこれを見たまひ、心につねに仏を念ずれば仏すなはちこれをしろしめす。衆生仏を憶念すれば仏また衆生を憶念し給ふ。憶念といふは一[4]たび其理を心[5]に思ひいれて後あらたまらざる心なり。仏の三業と衆生の三業とあひはなれざるゆえに、親[6]縁といふなり。是則衆生の称礼念すれば仏見聞知し給ふによりて[7]親しき縁といふにあらず。元より仏の御方に親しき謂れましますゆえに、称礼念すれば見聞知し給ふものなり。

二つに近縁といふはちかき縁なり。ちかき縁といふは是また阿弥陀仏の念仏の衆生にちかき縁なり。親子はしたしけれども必しもちかからず。他人は近けれども亦したしからず。今阿弥陀仏は第十八願[8]の乃至十念の願によりてしたしき縁を結びぬるうへに、しかも十九の来迎引接の願にこたへて近縁を具足するなり。すなはちもろも

① る＝なし
② の御名＝なし
③ 仏を＝なし
④ 一たび＝なし
⑤ 心に＝なし
⑥ 親＝「したしき」
⑦ て親しき……御方に＝なし
⑧ 願＝なし

ろの聖衆[1]のために囲遶せられて、最下の散機の前に臨終にきたりて目の前にまします。これその近き縁なり。是則衆生の方よりちかきにあらず。我等悪業をもちての故に、諸仏の大悲に捨られて、ながく人天の道すらなほとほざかり[2]、三途に堕在して永劫[3]の苦みをうくべき身なれども[4]、願力成就の功徳無礙光の体なるによりて、仏の方よりしひて[5]自らちかづき給へば、衆生また願を発して仏を見奉んと思へば、念に応じて[6]目の前に坐ます。これによりて近縁といふなり。

三つに増上縁と云ふはさはりなき縁なり。さはりなき縁といふはこれは阿弥陀仏の念仏の衆生を摂する所のさはりなき縁なり。いかんとなれば、第十九の来迎引接の願によりて近縁のすがたあらはれて苦機の前に顕現す。既にきたるまじき[7]仏体願力によるがゆえにきたり給ぬれば、なにの障碍ありてかは、仏の力にまさりてしばらくもさはり[8]あらんや。故に増上縁といふは、第二十の繋念定生の願に

① 聖衆＝「衆生」
② ほ＝「を」
③ 永＝「長」
④ べき身なれども＝「るべしと云へども」
⑤ ひ＝「い」
⑥ 応じて＝「応じて現して」
⑦ まじき＝「べからざる」
⑧ さはり＝「とゝこり」

こたへて、頼みをかくる衆生あれば来迎し給はずといふことなし。爰をもて我等が方よりは其障りおほくして出離の退縁しげしといへども、仏にさはりなき縁ましますによりて、魔縁魔境[1]もたぶらかす事なきなり。悪鬼悪神もおそる[2]ゝ事なくしてながく生死の火宅をいでて、立どころに不退の浄土にうまれゆく[3]故に、釈[註1]に曰、衆生称念すればすなはち多劫の罪をのぞく、命をはらんとする時、仏と聖衆とみづからきたり[5]迎接し給へば、諸邪業繋よくさふるものなし。故に増上縁となづくる[6]なり。

是則親縁のゆ[7]えは近縁に顕はれ、近縁の姿は増上縁にきはまる。所謂衆生称念すればすなはち多劫の罪を除くといへるは、始の親縁の功徳をあらはし、命をはらんとする時仏と聖衆とみづからきたりて迎接すといへるは次の近縁の相をあかし、諸[8]邪業繋よく障るものなしといへるはをはりの増上縁の体なり。

総じてこの三縁といふは、弥陀の凡夫を引[9]接する別願成就の功

① 境＝「界」
② おそる〻＝「をかす」
③ うまれ＝「うまれて」
④ 故に＝なし
註1 定善義
第九真身観の三縁釈中、第三増上縁釈
⑤ きたり＝「きたりて」
⑥ るなり＝「と云へば」
⑦ ゆえは＝「為に」
⑧ 諸＝「諸の」
⑨ 引接＝「摂」

徳、すなはち念仏を他力といふ無上大利の利益なり。称名の[1]諸行にすぐれたる事はたゞこの三縁具足の故なり。これによりて始め[2]諸経より終り観経にいたるまで、一代諸部の経典を引てひとへに念仏をあかす事を釈するなり。

しかれば即ち今南無阿弥陀仏と称する南無の二字は、是一[3]切善悪の凡夫かの仏の願力をきゝて、歓喜の心を生ずる、往生の帰命のこころなり。阿弥陀仏の四字は南[4]無の衆生をわたさんがために誓願を起[5]して、願行成就せる他力の一行なり。

他力といふは自力にあらざる心なり。有智無智にもよらず、破戒持戒をも論ぜず、在家出家をもえらばず、一念十念にもかぎらず、仰ぎて本願成就の仏力をたのむ故に、これを他力[6]ともまた強縁[7]ともいふなり。一行といふは諸行にすぐれたる義なり。

諸行多しといへども定善散善の二つをすぎず。定善といふはおもひをやめてこころをこらすなり。たとひ善心あれども相まじはる[8]を

① の＝「は」
② 始＝「初」
③ 一切＝なし
④ 南無＝「帰命」
⑤ 起＝「発」
⑥ とも＝「と云ふ」
⑦ ともいふ＝なし
⑧ はるを＝「ふるは」

邪観とす。散善といふは悪を廃して善を修するなり。たとひ精進なれども悪業あれば成就せず。しかれば我等定善を修せんとすれば妄念きほひきたりて観法成じがたし。浄土の荘厳を観ぜんとすれども思ひ衆務にみだる。如来の相好を観ぜんとすれども心六塵[註1]に遍す。耳には一切を仏法ときけども憍慢悪心は海よりもふかく、口には諸法をむなしといへども是非人我山よりも高し。①また散善を行ぜんとすれども善心これおろそかにして悪業いよいよさかりなり。孝養父母の心も念頃（ねむごろ）ならず。奉事師長の心もそむけり。②たとひまた頭をそり衣をそむるといへども、三千の威儀ことごとくかけ、戒行具足せ③る人も稀なればうけん④と思へども授る⑤人も有がたし。大乗の菩提⑥心も真実におこらざる故に、勧進行者もかへりて名利の媒（なかだち）となる。たとひ清浄の心をおこすに似たれども⑧なほし水にえがくにことならず。貪瞋の水は波たかく善心の絵は跡みえず。誰か定散の自力をはげみて不退の報土にいたらん⑨や。

註1 定善義
初観日想観釈

①また＝なし

②たとひ……そむる＝「頭（うべ）をそる」

③せ＝「す」

④ん＝「る」

⑤授る人も有がたし＝「うべからず」

⑥提＝「薩」

⑦らざ＝「さ」

⑧なほし＝なし

⑨や＝「とする」

今本願の名号は、おもひをやめて称ふ[1]べしとも誓ひ[2]給はねば定善をもはなれたり[3]。罪悪を廃して念ずべしとも勧め給はねば[4]散善をもはなれたり。定善散善の行者といへども名号に帰せずば往生を得べからず。定散の功徳を本願とせざる故に、罪障深重[5]の凡夫といふとも称念をいたさばかならず[6]来迎にあづかるべし。悪業の衆生を引接せんと誓ひ給へるゆえに、善人をいたし悪人をすてず、もしは男もしは女、称名の一行にあらん[7]よりは凡夫出離の道また二つあるべからず。釈尊所説の定散のうへにあらはす所の弥陀別意の弘願名号なるがゆえになづけて[8]一行といひし。

しかればすなはち一心に名号を称念して、阿弥陀仏はかたじけなく凡夫の行とたのみたてまつるべきなり。我ら衆生は貪瞋のおもひふかしといへども、阿弥陀仏は貪瞋の衆生の行体なるがゆえに帰命して往生す。愚痴[9]の心まどへりといへども、阿弥陀仏は愚痴の衆生の行体なるがゆえに称念して往生す。ここをもて[10]善導大師は、一切[註1]

① ふ＝「す」
② ひ給＝なし
③ をもはなれたり＝「にも」とあり続いて「非ず」と補足文あり
④ 給は＝なし
⑤ 罪障深重＝「悪障業障」
⑥ かならず＝なし
⑦ ん＝「ず」。私云「ぬ」欤
⑧ なづけて＝「各の」
⑨ の＝なし
⑩ ここを……大師は＝なし

註1 玄義分 序題門

善悪の凡夫の浄土[1]に生ずる事をうるは、みな阿弥陀仏の大願業力に乗じて[2]増上縁とせずといふことなし、といへり。

此ゆえに他[3]力の念仏は阿弥陀仏の[4]長時の行とは[5]すべし。故[6]に自力の功を尽して相続すべき行にあらず。或は名利の縁務にほだされて仏を念ずることなけれども、仏は智恵のこころをもちてしばらくも行者をすて給はずと念ずれば、南無阿弥陀仏すなはち長時の行なり。或は煩悩の睡眠[7]にさへられて仏を忘るゝといへども、仏は慈悲の眼をもちて常に行者を見たまふと念ずれば南無阿弥陀仏すなはち長時の行なり。或は病患にほだされ、或は死苦にせめられて、口に称ぜず、身に礼せず、心に念ぜざる時おほしといへども、阿弥陀仏の他力の一行に帰命してのちは、凡夫往生の行しばらくも退転すべからず。故[8]に念と不念とを心にわきまふ[9]べし、摂すると摂せざるとを仏にせむる[10]事なかれ。

この長時他[11]力の行を力のたふ[12]るに随ひてはげみ行ふ事、機にした

① 浄土に＝なし
② て＝なし
③ 他力の……阿弥陀仏＝「念仏他力の仏を」
④ 「の」は「を」欽
⑤ は＝なし
⑥ 故に＝なし
⑦ 睡眠＝「睡眠」
⑧ 故に＝なし
⑨ ふ＝「う」
⑩ を＝なし
⑪ 他力の＝「他力の行を力の」
⑫ ふ＝「う」

がひてかへりて別時の行といふ。弥陀経には一日乃至七日と説き、大経には本願の中に乃至十念とあらはせり。観経の下輩の三人は、上生は一念に往生し、中生は声にいださざるに往生し、下生は十念に往生す。あきらかにしりぬ。他力の念仏は長時不退の行なりといへども、念数の多少は①即時節の不同なりと云ふ事を。機にかへりて②時節を論ずれば一念も一形も別時なり。上註1尽一形、下至十念、三念五念仏来迎といへるこれなり。仏体について往生をいへば一念も長時なり。直に③弥陀弘誓の重きがために、凡夫をして念ぜしむる事をいたすれば即生ず、と釈せるこれなり。

仏体すなはち機をはなれざれば長時と別時と差別なし。長時別時一時④なれば臨終平生また異ならず。平生には長時を別時にはげみ、臨終には別時も長時にきはむる⑤。又いつを臨終とさだめ、いつまで⑥か平生⑦ならん。今生むなしく尽⑧なん此時すなはち往生の時なり。余命しばらくもとどまらば何⑨れの日か出離の日にあらざらん⑩。

① は＝なし
② 時節を＝「時節をは」
註1 『法事讃』下巻
③ 直に……重きがために＝「直に（ただも）為に弥陀弘誓重し」
④ 時＝なし
⑤ きはむ＝「極ま」
⑥ か＝「も」
⑦ な＝「た」
⑧ 尽なん＝「尽（つくし）なば」
⑨ 何れ＝「何（いづ）」
⑩ ざらん＝「じ」

①もし我仏を得んに、十方の衆生至心信楽して我国に生ぜんとおもひて乃至十念せんに、もし生②ぜずば正覚をとらじと誓ひて、已（すで）に成仏し給へる阿弥陀仏の体なるう③へに、ひろく十方法界の衆生の長時の行となり給ふなり。我等いやしといへ④どもなんぞ十方衆生の姿にもれん。愚なりといへどもたまたま至心信楽の身となれり。欲生我国のおもひ事にふれて起れり。乃至十念の功ひとへに仏力にまかす。不取正覚の誓ひいま現に成就したまへば、来迎の願なにゝよりてかあやまりましまさんや⑤。

女院御書　上巻⑥　終

○底本

（再訂版　女院御書上巻題言）

斯一篇曾応　四条院女御尊請、本地十一面観自在尊所宣説也。始自五劫思惟因誓、終至一念業成果満、他力難思妙用、鑽則弥堅仰則弥

①もし＝「たとひ」
②ぜ＝「れ」
③うへ＝「故」
④いへ＝「云ふ」
⑤りましまさんや＝「らん」
⑥上巻＝なし

高。今歎旧刻已亡、再訂寿梓公于世云。

文政三年庚辰初春

住于南紀檀林総持講寺尾張妙弁才題 白 木

○対校本

（旧版・女院御書跋文）

伝聞昔日、四条院崩御後、女院入釈門、尋出離要路、益傾心於安養。対善恵上人而問安心念仏之詮要。因茲上人不忍黙止、而為令易於通読、以倭字書要語、而授教解惑矣。後来号之謂女院書矣。然星霜屢移知者少。爰不佞空覚、周尋強求。遂乃得智通上人親筆一本。然後寿梓広世而備不朽。欲報乃祖之芳恩予願也。故忘固陋以跋巻尾云

寛文十一辛亥年秋七月日